不登校対応加配教員を活用しての全校体制での不登校対応について　【荒川区立Ａ中学校の取組】

不登校生徒の状況

当該生徒は第１学年の２学期から不登校となった。大きなトラブルなどは無かったが、発達的な課題もあり集団生活に馴染むことが難しく、本校の別室へ登校をするようになった。

具体的な取組

○　外部機関への連携の推進

毎週金曜日に支援委員会を不登校加配教員・特別支援教育コーディネーターを中心に実施し、情報交換を行い、SC や SSW の助言を受けながら、不登校生徒の対応について検討し、外部連携の方法を協議している。

○　個別対応の推進

担任が、不登校生徒本人、保護者に連絡をして現状の報告や要望を傾聴している。その内容を支援委員会に周知し、情報の共有を図る。登校した時や電話連絡、保護者の来校があった時に柔軟な対応ができるように準備をした。

○　別室指導の推進

別室は教室に戻ることを前提に通うこととして、校長面談を経て開始をした。別室の開室時間は第２校時から給食終了までとしている。さらに、教員を配置し緊急時にも迅速に対応できるようにしている。また、学習ファイルや出欠が分かるホワイトボードを職員室に設置している。

○　学校行事の活用

宿泊行事、体育的・文化的行事は参加意欲が高い。この意識を活用して、事前学習から事後学習まで参加するように呼びかけ、登校を促している。

成果

本年度は、５・６月に学校行事が集中した。対象生徒は、担任からの連絡やＳＣの働きかけにより、それぞれの行事の参加を目指した。その結果、教室や別室に登校し、修学旅行・運動会の準備や当日も参加をすることができた。

課題

行事の参加後、担任は連絡、家庭訪問等を継続したが、徐々に欠席が目立ち、２学期から不登校の状態になった。意欲を継続させることが課題である。

不登校対応加配教員活用した全校体制での不登校対応について【荒川区立 B 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、第１学年時に不登校状態となり教室に入ることが難しくなった。行事には出たい気持ちがあるため、毎日、１時間程度別室で指導している。合間に友達も顔を出し、少しずつ登校に向けて意欲をもち始めている。

具体的な取組

少しずつ、学校生活の制限も緩和し、新しい生活様式を取り入れながら、可能な限り学校行事等を実施してきた。その結果、学校全体の雰囲気が少しずつ明るくなってきた。QU 調査の活用により、生徒個人や学級集団の現状把握に努めることができた。

会議を通して各学年の不登校情報を共有し、不登校担当教員を中心として個々の生徒への対応の一本化ができた。結果として具体的な対応、指導に結びついた。

それぞれの要因に対して個別に対応を継続して、該当生徒個々に寄り添った対応を続けている。不登校状態は継続しながらも、家庭訪問や電話連絡をくり返して粘り強く対応することができた。即効的な改善は見られていないが、学校に対する意識や登校しようとする気持ちの変化が少しずつ見られている。

別室、個別指導を希望する生徒にはほぼ対応することができた。しかし、本校は空き教室が少なくギリギリの対応であった。

次年度は、学級増が見込まれるなど、個別指導用の部屋が減少する。そのため今後は、個別指導を希望する生徒が増える場合対応方法を検討する。

成果

２年間の継続した取組により、不登校対応加配教員を中心とした組織的な体制の構築ができた。SSW、SC の支援と、学校外機関の支援を生徒に合わせて行い、短い時間でも学校に来ることのできる生徒が増加した。

課題

短い時間に継続して登校できるようになったが、そこから先の学校生活への継続参加や学力不振の改善が課題となる。